

制経済立国」の完遂に向けて「平和の礎」になる気迫だけは、今でもいささかの衰えもない。

「余生とは、言うことなかれ照る紅葉」が、今の私の気持ちである。

## 上海からの引揚げ記録

神奈川県 和泉 淳 弘

はじめに

昭和二十一（一九四六）年一月二十二日、といつても、この日が人々にとって何も特別な日ということではない。何かの記念日というわけでもない。しかし、私の両親や私たち兄弟姉妹にとっては、忘れることのできない日である。それは、私たち一家にとって苦難の頂点となった日であったからだ。

私の家族

昭和二十年八月十五日の終戦を、私たち家族は上海で迎えた。しかし、この敗戦という歴史的な日をどう

いう状況の中で過ごしたのか、玉音放送をどのように聞いたのか、私にはその当日の一貫した記憶がほとんどない。天皇陛下の甲高い声と、雑音の中から断片的に聞き取れる内容から、今まで不滅不敗と教えられてきた「神国日本」が、負けるはずのない連合国側に負けたらしいと漠然と理解したと、その時に照りつけていた真夏の太陽のまぶしさだけはよく覚えている。それ以外は、私の記憶からすっぽりと抜け落ちているのである。

多分、あの日を境として起きた、予想もしない環境の激変により、記憶が切れ切れになってしまったに違いない。

その当時、私たち一家は両親と四人の兄弟姉妹の、合わせて六人の家族だった。私は上海日本中学の三年生、姉は上海第二高等女学校の四年生、妹はまだ学齢前で、弟は二年前に上海で生まれ幼児だった。

私の出生地は大阪で、小学校には大阪で入学したが、父の仕事の関係で途中から上海の小学校に転入した。私たち家族が内地から外地である上海へ移った

のは、太平洋戦争が始まって間もなくのことであったから、上海在住の多くの日本人に比べれば、随分と後発組であったといえる。

父は、東京外語学校のスペイン語科を大正の初めに卒業、日本郵船に入社して太平洋航路の客船の事務員や、事務長をやった後、陸に上がって大阪に落ち着き、昭和の初期にはスペイン語を生かして中南米諸国との貿易の仕事をした。

父の話によると、中南米で足を踏み入れない国はなかったとのこと。今とは違って航空機の使などは無かったところで、船と鉄道を利用して歩いていたのだ。

しかし、昭和七、八年（一九三〇年代半ば）過ぎのころから、満州事変、上海事変と日本の軍国化が次第に進み、独善的な帝国主義政策のために国際的にも孤立化が進んで、父の貿易の仕事も徐々にやりにくくなってきた。

昭和十五（一九四〇）年、日本軍は当時仏領であったインドシナに進駐したが、これに対抗して米国は直

ちに対日制裁を発動するに及んで、父もついに中南米貿易業をあきらめざるを得なくなった。恐らく相当に悩んだあげくのことだったろうが、つてを求めて中国での貿易に転身することを決心し、昭和十七年に一家を挙げて上海に移ることとなったのである。

大阪から上海へ

父は、しばらく前から単身で上海に渡っていたので、移住に関してのもろもろの仕事はすべて母がやり、私たち三人の子供を連れて大阪の天保山栈橋から、上海行きの船に乗船した。船は、太平洋戦争開戦直後にインドシナで日本海軍が<sup>だ</sup>捕したフランスの客船だったが、何万トンという豪華客船の一般乗船客は、何と私たち家族だけであった。

当時は、まだ日本側が圧倒的に優勢で、連合軍はアジアのほとんどの地域から追い落とされていたにもかかわらず、私たちの船は米潜水艦の魚雷攻撃を恐れ、夜は厳重に灯火管制をしいて、瀬戸内海から玄界灘に出てまっすぐに北上し、朝鮮半島沿岸から渤海湾へと大回りして南下、数日かかって揚子江に入った。

揚子江から黄浦江を遡江して間もなく、ジャンクの行き交う水面の向こうに、バンドとその背後に立ち並ぶ高層建築のスカイラインがはつきりと姿を現してきた。黄浦江に入ってからずっと船の前甲板に立ち通しだった私は、初めて目にするこの異国の風景にすっかり心を奪われていた。

当時の上海は、人口約五百万人を数え、アジアでも有数の商業貿易都市であり、また、戦争中とはいえ、独・伊などのいわゆる枢軸国、それにスイスなどの中立国の人々や、ナチスドイツに追われてヨーロッパから避難してきたユダヤ人などが住む国際都市でもあった。

在留している日本人も十万人を超えていたらしいが、これら日本人はみんな、上海居留民団という組織に登録しなければならなかった。日本人子弟のための教育施設はこの居留民団が管理しており、私が上海に移ったところは、小学校（当時は上海でも国民学校と言っていた）が十校、男子の中学校と商業学校が一校ずつ、高等女学校が二校、女子商業学校が一校あつ

て、運営されていた。

そのころ、内地では既に何年も続いている戦争のため、市民生活に必要な物は次第に乏しくなり、更に私たちが上海に移るころには、主要な食料品はもちろん、衣料品も配給制となっていた。日に日に物が店頭から姿を消していくことは、子供心にも心細いものがあり重苦しい雰囲気であったが、上海の生活の豊かさは、ほとんど想像もできないほどであった。

内地ではとうの昔に姿を消していたチョコレートやビスケットもふんだんにあつて、それが子供心には何とも嬉しいことであつた。父は、仕事の一八〇度転換のために随分苦労していたに違いないのだが、こちらはそのことは全く気にもせず、豊かな物に溢れた生活と、中国人、その他の外国人に囲まれた異国的雰囲気が大いに気に入って、たちまち新しい環境になじんできました。

虹口<sup>ホジキョウ</sup>を中心にした共同租界に多く住んでいた古くからの日本人居留民とは違って、後発組の私たちは、やや新開地の面影のある閘北<sup>カキホク</sup>地区に家を借りた。この

家から五分ほど歩いた所に第八国民学校があり、道路を隔てた向かい側には商務印書館の建物が破壊されたまま放置されていて、コンクリートの巨大な塊が果々と折り重なっていた。表向きは平和な上海の市街でも、日本軍と中国軍の激しい戦闘の跡片の生々しい場所であった。

当時、日本軍は華中では上海、蘇州、南京、漢口と、揚子江沿岸の主要な都市をかなり上流まで占領していたが、しかし、実際のところはこれらの地域でも、ほとんど点と線だけを維持していたに過ぎない。上海のように日本軍の完全占領下にあった拠点でも、日本人は、黄浦江対岸の浦東地区はもちろんのこと、フランス租界のすぐ南側にある旧城内の市街地の一部にすら、抗日ゲリラによるテロを恐れて、立ち入ることができなかつた。

第八国民学校の六年生に転入し、雰囲気には十分なじむこともないうちに、中学校の入試があり、無事に上海日本中学校に入学した。居留団経営のこの中学は、在留邦人の教育に対する高い期待度もあってか、

かなりの予算が当てられていたらしく、上海市北郊の見渡す限り広がる麦畑の中の一郭にあった。真っ白い鉄筋コンクリート三階建ての校舎とその隣の講堂、そして附属施設としての柔道場、剣道場などがゆったりと並んでいた。通学路の途中から波打つ麦の穂の向こうに一群の校舎が見えるのは、なかなか印象的な光景だった。

校則は、内地の中学も大抵そうであったように厳しくて、例えば、真冬の上海は中国奥地からの冷たい季節風のために結構寒いのだが、それでも制服の下には木綿の下着一枚、手袋は軍手に限って着用が許されていた。上級生による鉄拳制裁などのしごきもあったし、一年生の体力では少々きつい軍事教練もあったが、まず最初の学年の生活は平穩にスタートした。

#### 中学での生活と勤労働員

しかし、中学生らしい環境を過ごすことができたのは一年生の間だけで、二年生になると夏休みにはほとんど休日がなく、毎日、上海郊外の草原に集合して、陸軍の馬糧のための干し草作りをやらされた。中天か

ら照りつける真夏の太陽を遮るものが何もない所で  
草刈りであったので、腰を曲げたまま汗だくになって  
の作業の一日は、二年生の体力ではかなりこたえたは  
ずだが、皆、まじめによく働いた。私の左手には、そ  
のときに過って鎌でこしらえた傷跡が、あのころのこ  
とを思い出させるように残っている。

戦局は、私たちの期待に反して日増しに厳しくなっ  
ていった。サイパンは、草刈りに動員されていた昭和  
十九年の夏に既に落ち、年の暮れには戦場はフィリ  
ピンに移りつつあった。十月には神風特別攻撃隊の  
ニュースが報じられ、中学生とはいえ、私たちにも戦  
争の行く手に重苦しい空気が次第に立ちこめるようにな  
ってきた。

中国大陸に住む日本人の将来がどうなるのか、皆、  
口にこそ出さないが、それぞれ最悪の事態のことを考  
えるようになっていた。クラスメートのかなりが、内  
地に引揚げのため教室から姿を消しつつあった。

しかし、昭和十九年も暮れのころになると、船舶の  
不足と、東シナ海がアメリカ軍により制海・制空権を

とられてしまったので、上海・内地間の船による連絡  
は不可能となっていた。そのためにそのころ上海を引  
き揚げて内地に帰るクラスメートは、南京、北京、朝  
鮮半島と、鉄道を利用し地をはうようにして大陸を縦  
断し、関釜連絡船で海を越えていた。我が家でも、父  
と母は灯火管制下の暗い明かりの下で、内地に引き揚  
げるべきか、それとも上海にとどまるべきかを相談し  
ていた。家族が離散したときのために、炊事の方法と  
か衣服や靴下の繕いとかの日常生活の基礎を、母が手  
を取って教えてくれたのもこのころのことであった。

そのような空気の中で、昭和二十年の年が明けた。  
サイパンを発進基地にしたB29爆撃機によって、東京  
をはじめとして主要都市が爆撃されるといふショッキ  
ングなニュースが上海にも伝えられて間もなく、中学  
二年の三学期を迎えていた私たちに、本格的な勤労働  
員が発令された。

既に前年の秋には、東京やその他での学徒出陣の勇  
ましくも悲壮な状況が報じられていたし、急速に悪化  
してゆく戦場のニュースに、私たち中学生も言いよう

のない焦慮感にかられていたから、むしろ喜び勇んで動員先の工場へ出掛けた。

上海中学が動員された先は、黄浦江沿いの楊樹浦地区にあった江南ドックであった。この造船所は、開戦と同時に敵性資産として日本軍に接収され、三菱重工が運営していた。ここに配属された私たち総勢約五〇〇人の中学二・三年生は、造船所内の一隅にあった倉庫を改修した宿舎に、教師と共に寝泊まりして作業に従事することになった。

作業は鋳物・旋盤・仕上の三グループに分かれていたが、私は旋盤班に配属された。旋盤を回して棒鋼から二十耗機関砲弾を削り出す作業であった。朝は、海軍下士官の指導する海軍体操で一日が始まる。

一日中立ち詰めで旋盤を動かす仕事は、今から思い返してみてもかなりの重労働だったと思うのだが、たまたま込まれていた「皇国日本の勝利のため」というただそれだけのことで、親元を離れ工場に泊まり込んでの作業も、さほどつらいとは感じなかったと記憶している。

#### 敗戦前後の上海

江南ドックでの動員生活が始まって半年あまりが過ぎた八月、上海の街の様子が少しずつおかしくなり始めた。中国人たちは、所持を禁止されていたはずの短波ラジオで、重慶政府や米英側の放送をひそかに聴いていたに違いなく、ポツダム宣言や対日降伏交渉の様子が彼らには手に取るように分かっていたのだと思う。それに反して、私たち日本人は哀れなほど状況の進展に無知であった。

私自身も、沖繩が米軍の手に落ちた事態になっても、「神国日本」は必ずどこかで大反撃に転ずるに違いないと、無邪気にも信じ込んでいた。

八月十日を過ぎたころから中国人街の雰囲気は一段と不穏になり、十一日には街の一部で日本人に対する公然のテロが始まるという情報が流れ出した。この異常な空気を察知した教師の判断で、私たち動員中の学生は江南ドックでの作業を急遽中止して、それぞれの自宅に戻ることとなった。ところが十五日になって（あるいは十四日だったかもしれない）、血迷った一部

の海軍部隊が徹底抗戦を叫んで、私たち中学生を一斉に召集して上海特別陸戦隊に集合させるといふ事件が起きた。私も駆り出された一人であったが、この徹底抗戦は結局、うやむやのうちに解散するということがついに終わった。

このようなどさくさの間、私はあの玉音放送を聴いたには違いないが、この混乱の中の八月十五日の記憶はすっかりあいまいになっていた。ただ一つ鮮明に覚えているのは、この日を境にして灯火管制が解除になり、遮光暗幕を外した電灯の何とまぶしく、部屋の中が何と明るいことかと感動したことであった。

引揚げまでの暮らし

敗戦国民という立場は、私たち日本人が初めて経験することであったし、そのうえ当然のこととはいえず、八月十五日を境としてそれまでの日本人と中国人との立場が一八〇度逆転した。日本軍という軍事力をバックに優越的な地位にいた日本人は、その日から戦勝国民として圧倒的に優勢な数の中国の民衆に囲まれて、文字どおり息をひそめて生活しなければならなくなっ

た。

しかし、上海に住んでいた中国人は、これまで国際的な雰囲気の中ではぐくまれていて、外国人に対して寛容であり、さらには、蔣介石総統の「怨に報ゆるに徳を以てせよ」といふかの有名な布告のために、私たち上海在住の日本人は、略奪とか暴行とかに遭うことはほとんどなかった。一部の日本軍や日本人が行った戦争中の中国人への残酷な行為を省みると、私たちの周囲にいた中国人の人たちへの感謝の思いは、今でも到底言葉に表すことができない。

八月も終わりになろうというころ、中国国民党の軍隊が上海に進駐してきた。共同租界のほぼ中央を南北に走る目抜き通りの北四川路を進んでくるといふので、私も熱狂歓迎する中国の群衆に紛れてこっそりと見に行った。初めてこの目で見る「敵国」の軍隊であった。北四川路の両側の歩道をうずめ尽くして歓声をあげる中国人の中を、国民党の軍隊は堂々と進んできた。

これまで見たこともない大型のトラックやジープに

乗った兵士たちが、明るいオリブ色の軍服にアメリカ式の最新の装備である自動小銃や機関銃を胸にしっかりと抱えて、後から後から切れ目無く行進する光景は実に圧巻であった。蒋介石總統は、上海にはえり抜きの精鋭部隊を進駐させたのだろう。

内地から華中へ補充されてきた戦争末期の日本軍兵士たちの貧弱になってくる体格と、三八式歩兵銃だけの粗末な装備、終戦近くになるころは竹製の水筒だけを持った兵士すら見たが、それとこの中国兵とを比べ、日本は敗れたのだということを、初めて肉体的な実感として痛切に思い知らされたのがこの日だった。

間もなく、上海市に国民党の臨時政府が出現した。九月の初めごろだったか、この臨時政府の布告によって、在留日本人は日僑と呼ばれ、腕章を着けることが義務づけられ、しかも、虹口地区の「集中営」と呼ばれた一定区域内に住まわなければならぬことになった。

私たち家族が住んでいた閘北はその外側にあったので、狄思威路の瑞康里に住んでいた知り合いの一部屋

に、転がり込むこととなった。家具その他、かさばる物はすべて家に置きっぱなしにしてきたことは言うまでもない。

約八畳の一室だけだったが、引揚船に乗るまでの生活を、親子六人が詰めあって何とかしのいでいくこととなった。

中学校は閉鎖されて、もちろん通学することはない。一部屋の住まいでは、昼間いる所もないので、本を借りては毎日のように母屋の二階の屋根に上り、青空の下で終日読書をして過ごすことが多かった。

在留邦人たちはみんな職を失い、持っている物を売って生活費に充てる売り喰い生活が始まった。饅頭などの食べ物で自分で作って、街頭の屋台で売る人たちも多かった。我が家では、家にあったドイツ製のカメラだとか、スイス製の時計などの多少金目になりそうな品物が、次々と消えていった。

#### 引揚船に乗る

敗戦の年が暮れ、昭和二十一年がやってきた。そのころに開始された日本への引揚船に、いつ乗れるのか

ということが在留邦人の間での一番の話題となっていたが、私たち家族の場合には子供が四人という事情もあつたのだろうか、比較的早い時期に引揚げの順番が割り当てられ、昭和二十一年一月二十一日に上海を出帆する「江ノ島丸」という船名の輸送船に乗れることになった。この船は、戦争中は幸いに沈没を免れた、数少ない幸運な輸送船の中の一隻であつた。

私たち引揚者は、一人当りリュックサック一つと、それ以外にはごくわずかな携行荷物だけを持ち帰ることが許されていた。記録文書や写真類はすべて没収されるという噂も流れていたから、両親は家族の思い出の写真をいかにうまくわずかな荷物の中に紛れ込ませるかなどと、苦心していたようだ。そんなわずかな荷物も、いよいよ乗船というときには、市政府前の広場に一列に並んで、中国軍将校による厳重な検査を受けなければならなかつた。

一隻の引揚船には約四千人を超える引揚者が詰め込まれた。引揚船の船倉は、カイコ棚と呼ばれる木造のステージで何層にも仕切られ、垂直に近い木製階段で

上の甲板につながっていた。一層のカイコ棚の高さは一・二メートルぐらいたつたろうか。中学生の私でも立っては歩けず、はったままでなければ動くことができない。所々に薄暗い裸電灯がぶら下がっていて、詰め込まれている人たちの顔が辛うじて見分けられる程度であつた。四千人のための便所は、甲板の舷側に急造された木製の小屋で、穴から下をのぞくとはるか下に波立つ海面が見えた。

こんな輸送船ではあつたが、乗り合わせた人々はこれでやっと故国の土が踏めるのだという安心感で、表情も明るく、それなりに統制もよくとれていた。普通に航海すれば、二日か、遅くとも三日目には日本の港に着く距離である。

運命の一月二十二日

黄浦港の埠頭を昼過ぎに出帆して、揚子江の本流に出でずぐにしばらく停泊したが、そのうちに再び動き出し舟山列島の沖に差し掛かったのが、翌二十二日の午後遅くなってからであつた。海面は揚子江からの濁流でまだ褐色に濁ってはいたが、既に船の周囲は、

冬の季節風のために水平線まで見渡す限り白い波頭が寄せては砕ける東シナ海であった。午後四時ごろだったか、カイコ棚の中で窮屈に膝を抱えて座り、たまたま船内で会った上海中学の級友としやべっていた。

突如、耳をつんざく大音響と同時にカイコ棚が大きく揺れ動き、私も級友も周りの人たちも、いきなり五十センチメートルぐらいの高さに放り出された。それぐらい強烈な振動だった。カイコ棚は崩壊こそしなかったが、電灯が消えてあたりはほとんど真っ暗となり、さらにあらゆる所に積もっていたほこりが一面に舞い上がり、目も開けられなかった。

船内の人々は、ただごとではないと一瞬のうちにパニック状態となり、一斉に甲板に通じる梯子に殺到した。船底に近いカイコ棚から甲板まではけっこう高かった。殺到する人々の群れに、あつという間に級友とも別れ別れになってしまった。私は人の波に押されながら、気がついてみると甲板に上がっていたが、何が起きたのか全く分からなかった。

しかし、甲板上は次々と集まってくる人々であふれ

て修羅場と化し、泣き叫んでいる人も多かった。一方では、海に投げ出されたときの準備から、甲板上の木材をすさまじい形相で壊し始めている男もいた。

船は、ホイッスルから蒸気を吹きあげて緊急信号のような音を出し続けているので、その猛烈な音のために、甲板上では人々の声は何も聞きとることができない。気が付くと、「江ノ島丸」は船尾が傾いて徐々に沈み始めていた。後に知ったことだが、「江ノ島丸」は、米軍の投下した磁気地雷が船尾に接触して大爆発を起こしたのだった。戦争が終わったのだから、もう潜水艦からの魚雷攻撃も、艦載機による爆撃も無いと安心していたのが間違いだだった。終戦間も無い当時の機雷が海の中で浮遊していたのだった。

真冬の東シナ海に投げ出されたら、たとえ筏いかだにたかまっても一時間ともたないことは、中学三年生の私でも分かっていたし、戦時下の中学生の常識でもあった。しかし、どういふことか、そのときの私は突然目の前に立ちはだかった「死」に対して、恐ろしさ

を全然感じなかった。戦争中の感覚がまだ頭の中に残っていたのか。私は、この降ってわいた状況をほとんど平静に受け止めていた。半ば狂乱状態になっている大人たちで混乱していた甲板を避けて、沈み始めている船のかなり高い所へ独りで登っていった。両親や姉弟妹たちとはばらばらになっていたが、混乱する人々で身動きもとれない甲板では捜しようもなかった。

船は私が考えていたようには急速に沈まなかったが、それでもじわじわと船尾は海面に向かっていった。西の水平線近くに見えていた夕日の角度もどんどんと低くなっていった。この状態でどれくらいの時間がたったのか、よく覚えていないが一時間は過ぎていたかもしれない。

船の高い所に登っていた私は、視界の遠くに何かが見えた。波頭のはるか向こうで動き、走っている物体、目を凝らしてよく見ると、それは、波をけたてて全速力でこちらに向かってくる灰色の船ではないか。やがて甲板にいる人たちにもそれが分かっただらしく、

「助かるぞ！ 助かった！」という大歓声に変わり、波音のように沸き上がって、私にもよく聞こえてきた。

それは、「ブルーバード号」というアメリカ海軍の輸送船であった。もう一時間この船の通過が遅れていたら、私たちは間違いなく、冷たい真っ暗な海面に投げ出されていたことだろう。

「ブルーバード号」は全速で近づいてきたが、やがて沈みつつある「江ノ島丸」の後方で向きを変え接近し、船体を「江ノ島丸」の左舷にぶつけながら強引に接舷した。わずかな救命ボートでは、四千人を救出することは困難と判断して接舷したのであろう。しかし、冬の荒れた海上では両方の船体は波にあおられて、離れてはぶつかり、ぶつかっては離れるの繰り返しであった。両舷が接しているほんのその瞬間に、向こう側に飛び込まなければならぬ。失敗すれば両舷の間から海に落ちてしまう。人々は、両舷の甲板の高さの違いが少ない所に殺到した。

向こう側ではアメリカ人の船員が、飛び込んでくる

日本人を助けながら、女・子供が先だどどなっていた。大勢の人たちが手すりを乗り越えて、次々に飛び移っていった。しばらくして、かなりの人が脱出して空いてきた甲板に私も飛び降り、手すりを乗り越えて向こうに移った。もうそのころには、太陽は水平線の下に沈んでいた。辺りは闇に包まれていたが、「ブルーバード号」は、サーチライトを照らしながら救助作業を続けていた。

後で知ったことだが、実はそのころはまだ、母や三人の姉弟妹は、「江ノ島丸」に取り残されていたのだ。母は、姉と下の子供二人を連れのまま、大混乱の中で父とも離ればなれになってしまい、乗り移る場所を探しているうちに、「江ノ島丸」の方が次第に沈んで両舷の甲板の高さが違いだしてきたために、手すり越しに乗り移るチャンスを失くしてしまったのだった。「江ノ島丸」の甲板上にまだ取り残されていた母たち何人かの日本人を発見した「ブルーバード号」は、救命ボートを降ろした。それによって助けられたのであった。

母たちがそんなに恐ろしい目に遭っていたとは露知らず、「ブルーバード号」が照らす青白いサーチライトの光の中で、船首を上にして沈んでいく「江ノ島丸」の、夜目にも鮮やかな最期の姿を私は眺めていた。

「ブルーバード号」は、沈んでいく船に人が残っていないことを確認して現場を離れ、真っ暗やみの海を全速で走り出した。

救助された私たちは、もう一度上海に戻ることに、私の家族六人が皆無事であったことを船上で知らされた。船では、女・子供は船内に収容され、男はみんな甲板上で休むように指示された。冷たい海水に漬からずに助けられたことはもちろん嬉しいことではあったが、しかし、真冬の海上を高速で航行する船の甲板には、氷のように冷たい風がびゅうびゅうと音を立てながら吹き抜けていて、身に着けている制服と薄い下着だけでは歯が鳴るような寒気で体が凍りつき、生きた心地がしなかった。

この触雷事故で、約二百人近くの引揚者が亡くなっ

たこのことである。ある人は爆発の瞬間の衝撃によってカイコ棚などの下敷きになり、ある人は移乗の際に海に転落して死亡されたということである。現在であれば間違いなくTVや新聞のトップニュースになる事件も、当時は、新聞の片隅に数行書かれたに過ぎない。人の命に対する価値観が、その程度にしか認識されていない時代であった。

#### 再び引揚船で日本へ

わずかばかりの携行荷物も全て「江ノ島丸」と共に、沈んでしまい、私たちは文字どおりの着の身着のままの状態で上海に戻った。両親が苦心して持ち帰ろうとして荷物の中に入れた家族の写真も、もちろん東シナ海の海底に船と運命を共にした。それでも私たちは、家族六人全員が負傷もせず救出されたのだから、運がよかったと感謝しないわけにはいかない。

上海に逆戻りした私たちは、数日の後に次の引揚船に優先的に乗せられて内地に向かった。上海の在留邦人から災害見舞いとして贈られた衣料品だけが荷物だった。

今度は何事も起こらずに無事に航海し、鹿児島港に入り、日本の土を踏んだ。

そこからは、引揚者用に編成された列車で九州を北上し、更に本州を東へ向かうことになった。途中の駅で人々は次々に降りていったが、かわりに山のように大きな荷物を背負い、険しい顔をした一般の乗客が、引揚者専用列車ということには全くお構いなく、デッキからも窓からも入り込んできて、手洗いにいくことも難しいすし詰め状態になってしまった。制止する駅員もいない無法状態だった。日本の鉄道がこんなレベルにまで落ちていくということを、私たちもいや応なく気付かされた。

翌日の早朝、列車は広島駅を通過した。原子爆弾のことは既に上海で承知していたが、目の前にその惨状を見て私たちは、声をのんだ。

#### 大阪での生活

母方の祖父が戦前から大阪市の南に住んでいたの  
で、私たちはとにかくそこを頼ることとなった。祖父との間は何年も前から音信不通の状態であったから、

大阪駅で引揚列車から降りたときに、果たして祖父の家が戦災に遭わないで残っているかどうか、そこに行き着くまで重い不安が私たちから消えなかった。しかし、誠に幸いなことに、祖父も家も無事であった。ここが戦後の私たちの住まいとなったのである。

命だけは六人とも無事で帰ってきたものの、一家の生活をどう支えていくかが父の最大の問題であった。かつての中南米貿易という仕事を、日本の軍国化、それによる国際的な孤立化で失い、そこから転身してよりやく築いた上海での幾ばくかの資産も、敗戦により一夜にして失う結果となった。さらに辛うじて持ち帰ろうとしたなげなしの物までも、引揚船の沈没で失うという運の無きは、既に五十歳を過ぎていた父にとっては、ほとんど回復不能な打撃であったに違いない。しかし、まだ一人前には程遠い四人の子供を抱えた一家の長としては、行商をしてでも家族を養うための稼ぎをしなければならなかった。

大阪は戦前、父が中南米貿易をやっていた場所でもあり、昔の知り合いを訪ねて細々と雑貨の商いを始め

た。そのころはまだ物資の統制も厳しく、物を動かす輸送手段も回復していなかったから、父は仕入れたわずかな雑貨を運ぶために、毎日、大きなリュックサックを背負って出掛けていたことを思い出す。一方、私の中学への転入問題もあり、商売の合間を縫って、父は私を連れて幾つかの中学校を訪ね回った。

敗戦後の混乱期とはいえ、私の場合、上海中学の在学証明書も成績表も引揚船の沈没と共にすべて失っていたので、訪ねた学校では事情を説明してお願いするより仕方がなかった。幾校かで断られた。幾つ目かの訪問先の府立住吉中学校でやっと転入が認められた。証明書などを全く持っていない私を一言で受け入れた、当時の吉田校長の御厚意を忘れることはできない。こうして昭和二十一年二月、住吉中学の三年三期に転入した。

転入してすぐに分かったことは、上海中学の二年三学期からほとんど一年余の間、私は動員、敗戦、引揚げと続いたごたごたのために全く勉強をしておらず、それが大きなハンディキャップになっていたことだっ

た。数学も、物理も、化学も、その他授業のほとんどが、進み過ぎていて全く理解できなかった。転入してすぐの三年三学期の期末試験の結果は、全く惨憺たるものだった。上海中学では、成績には多少の自信があっただけに、このショックは大きかった。一年余にわたって何も勉強していなかったというハンディを取り戻すには、とにかく自分で勉強して追い付いていくよりほかに方法はない。焼け跡に残っていた古本屋を探し、戦前に発刊された参考書をなけなしの小遣いはたいて何冊か求めた。

そのころの大阪は極端な電力不足で、ほとんど毎晩のように停電するのが当たり前という状態だったから、最初のころは、ロウソクの明かりで勉強していたが、ロウソクの明かりというのは炎がちらちらと揺れて長時間の読書にはとても耐えられない。母に頼み灯油のランプを買ってもらい、ようやく停電の心配が無くなり勉強に励んだ。住吉中学での授業の内容がどうにか理解できるようになるのに半年はかかっただろうか。

学業の遅れもさることながら、もっと参ったのが当時の食糧事情だった。だれもが闇の買い出しで近郊の農家から芋や幸運ならば米を手に入れる、いわゆる竹の子生活の時代ではあったが、すべての財産を失って引き揚げてきた我が家には、農家に持って行く物が無かった。辛うじて母が残しておいた若いころのわずかばかりの着物や帯が、たちまちのうちに芋や米に消えてしまった。一日に一合何勺とかの配給米で足りるはずもなかったが、その配給も遅配や欠配が多くほとんど飢餓状態の毎日であった。三度三度の食事は、おおむね水の如くに薄いおかゆだったが、子供たちの腹もちを少しでもよくしようという母の苦心で、かぼちゃの葉や茎、大根の千切りなどが浮かんでいたことを思い出す。なまじつこの間までは上海で、少なくとも食べ物については不自由の無かったことが、若い十五歳の胃袋には余計にこたえたのであろう。住吉中学には、南大阪の「ええとこのぼんぼん」が多く、彼らの家庭ではこんな食糧難の時代でもまだ蓄えを持っていたよう、クラスメートの多くは白米の飯をぎゅう

ぎゆうに詰めた弁当を持って来る。売り食いすらま  
にならない我が家では、学校に持っていく弁当の中身  
はやせて細いふかし芋一本か二本というときもあつ  
た。いつも腹を減らして飢えているこちらとしては、  
空腹の惨めさもさることながら、闇の白米をたらふく  
食っている「ええとこのぼんぼん」に猛烈な敵愾心  
を持ったものだった。

飽食の時代といわれる現代からすると笑い話としか  
思われないことだが、しかし私は、あの数年の間毎日  
寝ても覚めても苦しめられた空腹の記憶を、忘れるこ  
とはできない。

その後私は旧制高校から国立大学に進んだが、時代  
の波に翻弄され続けた父を見てきて、父のようなキャ  
リアは絶対に繰り返したくはない、そのためには自分  
自身が技術的な経歴を身に付けていなければと、心に  
銘じていた。今になって振り返ってみると随分と幼稚  
な青臭い考えではあったが、エンジニアとしての道を  
選んだ。また、あの時代の若者の常として、社会主義  
的な思想の洗礼も受けた。

しかし、昭和二十八年に大学を卒業するころには、  
やはり自分の習得した技術を実際に社会の中で生かし  
たいとその方面の会社に就職した。この会社が、賠償  
関係の海外工事を引き受けることになり、そのための  
海外勤務に手を挙げた私は、昭和三十四年から二年余  
りをインドネシアで過ごすことになった。当時は、ほ  
とんど希望者のいなかった海外建設プロジェクトに進  
んで参加した動機の中には、上海引揚げのころからひ  
そかに抱いていた、「いつかは日本ではなく海外で、  
自分の技術を生かせる仕事をやりたい」という願望が  
強くあったからである。その願望の奥をつきつめると、  
少年時代を過ごした上海の、あの一種言葉では表  
現し難い国際都市のざわめいた異国的雰囲気にとどり  
つくのである。

その後の私たち

結局、インドネシアでの仕事のあと、私は技術者として  
の経歴の大半を海外建設プロジェクトで過ごすこ  
とになるのだが、六十八歳になった現在も国際プロ  
ジェクトに関連したマネージメント業務を仕事として

いる。

父は、七十歳になるまで大阪で中南米貿易の仕事が続けて私たちを育てあげたが、戦後の貿易は制度こそ自由にはなったが、大資本の商社が独占的に活動する世界となり、父のごとく大阪の中小企業をベースにした細々とした商売ではなくなっていたようだ。それでも父は、持病の糖尿病以外はおおむね健康で、酒を楽しみつつ八十八歳まで生きた。「父、危篤」の知らせを受けたときには、私はアメリカで勤務していたので、すぐ飛行機に飛び乗るようにして帰国したが、死に目には会えなかった。

母は、今年九十五歳だが、耳はほとんど聞こえないがこの年齢としては健康な方で、幸いに今のところ頭もすっかりしていて、大阪の子供たちが面倒を見ている。

引き揚げてきて五十三年、兄弟姉妹四人はそれぞれに生活し、平均的日本人のレベルで幸せに暮らしている。高齢化社会の中で、私たちもその仲間入りしつつある今日、上海から引き揚げてきたころの思い出を、

それぞれの子供や孫たちに話をするようなことは、多分無いだろうと思う。現在のこの平和で豊かな世の中では、理屈としてはともかく、実感としてあの時代のことを若い人たちに理解してもらうことは、とてもできないことであろう。

中国兵に両側を囲まれて、リュックサックを背中に上海市政府前の広場から黄浦江の埠頭まで延々と行列を組んで、二月の凍るような季節風に追いついて行ながら歩いたこと。東シナ海の夕日のもとで「江ノ島丸」が刻々と沈んでいった光景。帰国して大阪でのあの惨めな空腹と飢えの生活。これらの思いは、口に出して話そうとした途端、何か空しい言葉と化してしまい、実体を伝える力を失ってしまうのだった。

戦争の悲惨さ、むごたらしき、非条理さは残念なことではあるが、徐々に、しかも確実に、日本人の記憶から消え去っていくであろう。それを努めて語り継いでいくことは、容易ならぬことである。

しかし、私たちの引揚げは、他の多くの引揚者、特に満州からの引揚げの方々が巻き込まれた、あの悲惨

な体験に比べれば、むしろ幸運であったとしかいえないであろう。私の引揚げの体験が記録の片隅に残るとすれば、大変に有り難いことである。